

あゆみ通信

VOL. 198
 あゆみの会(真宗大谷
 派大阪教区第2組同朋
 の会推進員連絡協議会)
 会長 細川 克彦
 広報 本持 喜康

第2組聞法会⑤開催



2025年9月6日(土) 午後2時から、第2組聞法会が、浪速区の唯専寺(本田哲住職代務)で、組内の住職や坊守、門徒と推進員等20名が参加して開催されました。

墨林浩組長(光照寺住職)の開会。職員の松岡氏の調声で、「正信偈」「念仏・和讃」「回向」を全員で勤めました。今回から、「善導章～親鸞章」を、廣瀬俊先生(17組法観寺住職)が講釈されます。今日は、主に「善導章」を、いつも通り、資料と小道具を駆使されながら、ユーモアを交えて楽しく話していただきました。

まず善導大師が著された『観経疏』で、「王舎城の悲劇」の韋提希夫人の問いに答えて、お釈迦さまが「定善十三観」→「散善(九品)」そして、お経の終りに、阿難がお釈迦さまに質問して終わるくだりまでを話されました。

そして、善導章の「善導独明仏正意～」以下を意識されて、善導大師はただ一人、これまでの誤った説を正して、「まことのこころ」をあきらかにされたと話され、善導大師が「仏の正意(まことのこころ)」を明らかにしたと言うことは、『正信偈』の冒頭にある法蔵菩薩の願い(「正信偈」のメインテーマ)ー「法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所」を再度確認されていることに依ると。

休憩後は、「まことのこ

ろ」について「あんぼんまん」作者のやなせたかし氏の言葉や歌詞、また、元米海兵隊のアレンネルソンさんがベトナム戦争に参加し体験した後、帰国後PTSDで苦しみながら、意志の協力で克服後、10年余り来日して全国で平和公園を(難波別院でも2007年2月に)紹介されながら話されました。

そして『歎異抄』の親鸞聖人の「如来よりたまわりたる信心」は、蓮如上人が『御文』で「信心と言える二字をば、まことのこころと訓めるなり」と話されました。

第2組聞法会 6

日時 **10月16日(木) 14:00**
 会場 **西教寺(阿倍野区阿倍野元町)**
 講師 **廣瀬俊先生(17組法観寺)**
 参加費 **500円**

所長巡回終わる



2025年8月20日(水) 午後6時から天王寺区の光照寺(墨林浩住職)に、大阪教区禿信敬所長と教区スタッフをお迎えして、第2組所長巡回が開催され、組内の住職、坊守と門徒会役員、あゆみの会会長等22名が参加しました。

これは7月に開催の「教区会」「教区門徒会」で承認された内容と宗派経常費と宗派の現状や教区の運営方針の伝達などの説明を各組に伝え



親鸞のことば

どうしても 教えを聞きたいその魅力

まこと おんこう 良に師教の恩厚を仰ぐ「教行信証」

話題の塾教師や大学教授の講義、有名な政治家の演説など、多く人が注目しているものです。話の中身もそうですが、魅力的な人が話すからこそ誰もが話を聞いてしまう、と言うこともあるのでしょうか。

専修念仏の教えで人気のあった法然にも、そう言う部分があったのかも知れません。

教えの内容が分かりやすくしっかりしたものであることはもちろんですが、法然だからこそ一層その教えが魅力的に見えてくる。親鸞も、法然が説く念仏の教えはもちろん、法然の人柄にも惹かれて行ったことでしょう。

門弟の一人である唯円が後に執筆したと言われる『歎異抄』には、関東の門弟たちと共に上洛し、親鸞に教えを聞いたことが記されています。

当時の旅は、道も治安もよくないわけですから、非常に危険なものでした。門弟たちは命を懸けて親鸞のところへ教えを聞きに来て、親鸞もそんな彼らに対して敬う心をもって迎え入れ、教えを伝えていったのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

し のちのキャッチボール

7年前に亡くなった長女が、昔、父母の法要の際に言った言葉を思い出します。

お勤めのあと、藤井善隆住職(当時の法話を聞いた娘が、「私のことを言われている」「お父さん、私のことをご住職に話した?」)と。

2018年に娘が亡くなった時に残されたメモに、「葬儀は、即應寺の藤井住職へ。お骨は、東本願寺に納めてください」と書かれていました。

娘婿の実家の宗旨は本願寺派でしたが、娘婿とご両親は、ご理解をいただいて、娘の望みとおりに、即應寺の藤井善隆住職へ通夜式と葬儀と法事をお願いしました。南無阿彌陀仏。(本)

る年中行事です。

まず、宗派経常費の完納表章で第2組を代表して墨林組長が、連続完納で宗恩寺也田英二郎住職と南照寺友澤秀三住職が、禿所長から表章されました。

続いて禿所長から重点事項の説明をいただき、また教区スタッフからそれぞれの項目について、今年4月に開催した宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶費去要等とあわせて説明がありました。

その後、若干の質疑応答があり、第1部を終了。休憩後、懇親会を開催して歓談し、閉幕となりました。

11月の仏事

第2組報恩講

日時 11月21日(金) 16:00

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 お勤めと法話

講師 尊慶典先生

(浄土真宗本願寺派 壽光寺)

如是我聞

廣瀬俊先生法話問書

佛足寺 細川克彦

1年ぶりに第2組聞法会に出講された先生は、今回『正信偈』の善導大師と源信僧都のところをお話下さいました。

冒頭にある「善導明正意」に

ついて、ある人の現代語訳「善導はただひとりこれまでの誤った説を正して、仏のまことのこころを明らかにした」を紹介されました。

そして『觀無量壽經』の概略を話されたのち、どう正されたのかについてお話しくださいました。

これまで仏教学者は『觀無量壽經』の中心は、お浄土や阿彌陀仏を以て思い浮かべて修行することを中心と説かれていると主張してきたが、善導大師がひとり、人はすべて凡夫でありその凡夫を救う本願を述べられたものであると、主著『觀經疏』で述べられ、古今楷定(間違ったものを正しく定める)とされていると。

そして、源信僧都はさらに極重悪人を救うの本願であると言われたと。

竹中智秀先生がよくおっしゃっていた「えらばず、きらわず、みすてず」の心か弥陀の本願であり、ちょうど、



手のひらを太陽ひかざすと血の流れているのか見えるように、黙々と私たちを生かし、はたらいてくださっているものであると話されました。

休憩後は『正信偈』のお勤めで、「善導明正意」が少しトーンを変えて上げられていることを話題とされ、それはここで『正信偈』の始めの「法蔵菩薩因位時、在胎在王仏所」に戻って、大事にされたからではなかと、話されました。

親鸞聖人は「如来より賜たる信心」と言われ、蓮如上人は「信心といえる二字をばまことのこころ」と訓めるなり」と言われるように、「仏の正意」とは「まことのこころ」であり、それこそ『正信偈』の一つのテーマではなかと。

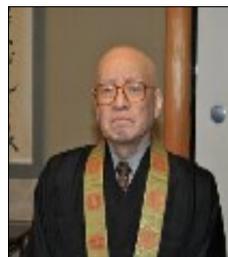
やなせかかし作詞の「アンパンマンのマーチ」のCDを聞かせていただいたり、アレンベルグさんの本当の戦争の話、またある中学生がファミコンを買うために一生懸命アルバイトをしてためたお金で、ふと考えが変わり、自分の古着ばかり着ている妹にジャージを買ってやったり、手の荒れたお母さんにハンドクリームを買った話など、「まことのこころ」が話された具体的な話をされ、本願について分かりやすく話して下さいました。

紙上法話

和国の教主⑩

親鸞聖人における聖徳太子観
池田勇諦先生
続・観世音菩薩の発遣

私は、そこに「父のごとくにおわします」、「母のごとくにおわします」と言う最も具体的な親鸞聖人の喜び、恩徳感あったと受け止めずにはいられないのです。親鸞聖人が聖徳太子に捧げられた恩徳感には、軽々しく云々することを許さない厳しさ、深さを持っておりませぬ。



今申し上げた親鸞聖人の限りなく深い太子讃仰のお心に直参することによって、清澤先生が本当に願われた、親鸞聖人の教えを世界に向かって伝えなければならぬ。そして、日本の国を帰依三宝に立つた政が行われるような国土にしな

ければならないと、聖徳太子のご生涯をあげてのご苦労から、暁鳥先生は感得されたのだろうと拝するのです。それが暁鳥先生の聖徳太子に対する深い思い入れの所以ではないかと受け止めている次第です。親鸞聖人の聖徳太子に対する恩徳感が、清澤先生、暁鳥先生と展開して具体化されてきたことを近頃強く感じております。今日のご縁をいただきまして、私はこのことをどうしても申し上げたかったのです。

安心・行儀二つの系譜

「親鸞聖人における聖徳太子観」ということをもっと詳しく申し上げねばならないのですが、このことについては大事な課題として、皆さん方もよくよくあたためていただきたいと思います。真宗のお寺にお参りしますと、余間には七高僧の御影と聖徳太子の御影がかけられていますでしょう。真宗寺院に聖徳太子の御影が掛けられていることは、何故か。今申し上げてきたことが、その背景としてあることをお感じいただければと思うわけでございます。

浄土真宗の仏道をたずねる時に、形式から言えば二つの系譜があるのです。ひとつは、七高僧の系譜。いま一つが、聖徳太子の系譜です。七高僧の系譜は、信心、安心の系譜です。聖徳太子の系譜は、生活スタイルの系譜です。伝統的な言葉で申せば、「安心は七祖、行儀は太子」と言われますね。ですから、真宗仏教の伝統は、七高僧と聖徳太子の二つです。その伝統を受けられたのが親鸞聖人です。まさに、七高僧と聖徳太子との出遇いが浄土真宗の仏教でございます。聖徳太子のご恩徳に私たちが注目していかねばならない所以であります。色々申し上げて、おわかりにくかったかもしれませんけれども、お話しはこういうことにさせていただきます。終わり。

(注) 池田先生のご法話は、2015年10月に開催の「暁子会」で講演されたものを発刊されたものです。林暁寺先生の書を通してご縁が社来て、引用させていただきます。

今お話し池田先生の大事なお話を掲載できましたことに感謝いたします。南無阿彌陀仏。